# 苦手な生徒との出会いが中学校教師に与える影響

学校教育研究科　人間発達教育専攻
教育コミュニケーションコース
M11007E
松崎　京子

**問題と目的**

教師は常に平等性を重んじるが，生徒に苦手意識を持ち，関係がうまくいかなくなることがある。教室内での教師との関係は生徒の成長に大きな影響を及ぼす。一方，教師にとって，苦手な生徒の存在はストレスや苦悩を増大させる。教師 - 生徒間のネガティブな関係は両者のみならず，学級全体にとっても改善されるべき重要な問題だと思われる。教師にとって苦手な生徒の特徴を把握し，教師の感情・対応，経験，経過といった一連の過程を明らかにすることを目的とする。

**予備調査**

**目的**：「教師にとって扱いにくい生徒の行動特徴」尺度，「扱いにくい生徒に対する教師の感情・対応」尺度の作成と質問項目の分析・検討

**方法**：・調査対象

小学校高学年･中学校･高校の教師 90 名

・調査手続き　質問紙を個別に配布，回答後その場で回収または後日回収。84 部分析（有効回収率 88.9%）。

・質問紙の構成　個人属性に関する質問 9 項目，「教師にとって扱いにくい生徒の行動特徴」尺度（筆者作成，青木ら(2009)の「教師にとって扱いにくい生徒」の特徴から 11 項目など 31 項目，4 件法，「扱いにくい生徒に対する教師の感情・対応」尺度（筆者作成，香月ら(2007)の FCJ より 11 項目など 32 項目，7 件法），関係改善などの質問 3 項目

・調査時期　2011 年　11 月初旬

**本調査**

**目的**：「教師が苦手だと感じるのは，生徒のどのような特徴なのか」「苦手な生徒に対するとき，教師はどうなってしまうのか」「苦手な生徒に対して教師はどのように向き合い，どのような経過をたどるのか」この 3 点を明らかにし，教師が苦手な生徒に出会うことの意味を考える。

**方法**：・調査対象　中学校教師　350 名

・調査手続き　質問紙を個別に配布，または知人の教師に配布してもらい，回収は，個人または，学校ごとにまとめて郵送してもらった。241 部回収。223 部分析（有効回収率 63.7%）。

・質問紙の構成　個人属性に関する質問 8 項目，「教師にとって苦手な生徒の行動特徴」尺度（32 項目，4 件法），「苦手な生徒に対する教師の感情・対応」尺度（30 項目，7 件法），「教師の経験」尺度（筆者作成，茅野(2010)の「生徒理解の転機経験」尺度より 11 項目など 24 項目，4 件法），宮戸・上野(1996)による「支援的ユーモア志向」尺度（8 項目，5 件法），経過を問う質問（「生徒理解できなかった」「関係改善」「今後に活かせる」「今後に不安」の 4 項目，6 件法），原因帰属を問う質問（2 項目，7 段階）。

・調査時期　2012 年　2 月～3 月

**結果および考察**

(1) 尺度の構成

「教師にとって苦手な生徒の行動特徴」尺度（「自己中心的」「問題行動」「無気力」「消極的」の 4 因子），「苦手な生徒に対する教師の感情・対応」

尺度（「緊張・不安」「いらだった介入」「援助欲求」「ストレス・不快」「やりがい感」の5因子），「教師の経験」尺度（「同僚相談」「研修研究」「行き詰まり」「対処行動」「生徒視点取得」「自己への振り返り」「生徒への気づき」の7因子）

(2)「教師にとって，生徒のどのような特徴が苦手だと感じられるのか」

自己主張の強さや協調性のなさといった自己中心的特徴が上位にあげられた。同質的で一斉共同体主義ともいえる学校において，自己中心的な行動をする生徒は，集団の統制を強く望む教師の価値観を揺るがす存在となっているのではないかと考えられた。

(3)「苦手な生徒に対するとき，教師はどうなってしまうのか」

教師は，一般的な生徒に対しては援助欲求ややりがい感が高く，苦手な生徒に対しては拒絶感や不快感などの否定的感情を増大させていた。平等性を重んじる教師であるが，生徒によって感情が異なる様子が認められた。

(4)「苦手な生徒に対して教師はどのように向き合い，どのような経過をたどるのか」

分析1　教師の感情・対応，経験，経過との関係

「生徒への気づき」が「生徒理解」「関係改善」「今後に活かせる」に影響していた。また，肯定的な経験・経過と最も多くの正の相関を示したのは，「援助欲求」であった。教師の自己否定的な感情（「緊張・不安」）は，「行き詰まり」「自己への振り返り」「今後に活かせる」「今後に不安」と正の相関，生徒に対する否定的感情（「いらだった介入」「ストレス・不快」）は，「同僚相談」「行き詰まり」「自己への振り返り」「生徒理解できなかった」と正の相関，「生徒への気づき」「関係改善」と負の相関がみられた。

分析2　教師の苦手意識の原因帰属

苦手意識の要因を教師自身と捉えていた自責群は，「緊張不安」「援助欲求」「行き詰まり」「自己への振り返り」「関係改善」「今後に活かせる」が他責群よりも有意に高かった。教師が自分の問題として捉えることで，苦しみながらも関係が改善し，今後の展望につながったと考えられた。

分析3　教師の感情・対応によるクラスタ分析

Ⅰ両面タイプ；陽性感情（「援助欲求」「やりがい感」）が高く，陰性感情（「緊張・不安」「いらだった介入」「ストレス・不快」）もやや高い（57.4%）。Ⅱ陽性タイプ；陽性感情が高く，陰性感情が低い（28.3%）。Ⅲ否定的タイプ；陽性感情が低く，生徒に対する否定的感情がとくに高い（14.4%）。Ⅱ陽性タイプは肯定的経過の得点が高かった。Ⅰ両面タイプは，苦渋経験と肯定的経過の両得点が高く，「今後に活かせる」の得点がⅡ陽性タイプよりも高かった。教師としてつらい経験も多いが，自己に対する振り返り視点が増え，教師自身の成長が促されたと考えられた。

分析1～3より，生徒への気づきと援助欲求が，生徒理解や関係改善，今後に活かせるという展望と関連していた。また，教師が自己に対する否定的感情を有し，自分の問題として振り返ることが，展望につながることが明らかとなった。

本研究を通して，「生徒への気づき」は，生徒理解を進めること，「生徒に対する否定的感情への気づき」から，無駄な衝突を回避すべきこと，「教師自身に対する否定的な感情」や「自分自身の問題として捉える」といった「自己に対する気づき」は，教師にさまざまな苦しみや葛藤を経験させるが，そこから教師としての成長が促されることが示された。苦手な生徒と出会ったときに教師が自己とどう向き合うかが問われている。

主任指導教員　中間玲子
指導教員　　中間玲子